

人紙の表

難関の

スペイン語技能検定3級合格

語学力を「軍縮・反核」に

活かしたい



総合政策学部4年

井上八香さん



大学に入ってからスペイン語勉強

難関といわれるスペイン語技能検定3級に合格、3月18日に東京・信濃町の財団法人日本スペイン協会で開催されたスペイン語技能検定試験成績優秀者表彰式（文部科学賞後援）に招かれ、表彰状と記念品を授与された。

合格したスペイン語技能検定3級は、英語検定の準1級に匹敵する。井上八香さん（総合政策学部4年）は、大学に入ってからはじめた勉強で、この難関をクリアした。

「せっかくスペイン語を勉強しているのだから、何か資格をとりたい」と思ったって、スペイン語検定を受験。1次試験が翻訳、2次試験は面接とスピーチ。井上さんは、易しい級から順に受験したのではなく、「飛び級」でいきなり3級を受けて、見事合格したのである。

コスタリカに行きたくなって

スペイン語を勉強しようと思ったのは、高校生の時。軍隊を廃止して国の防衛力を高めたというコスタリカについての本を読み、「コスタリカに

興味湧き、行ってみたくなった」という。そのコスタリカがスペイン語圏だったので、大学に入ったからスペイン語を学ぶことを決意した。

しかし、入学した総合政策学部にはスペイン語の授業がなかった。そこで経済学部の授業に出席させてもらって週2日スペイン語を勉強した。

さらに高校時代からの念願のコスタリカに行つて、スペイン語を磨いた。2007年2月から9月までの7ヶ月間、コスタリカでインターンを経験。国際反核法律家協会（IALANA）で研究員として活動した。

国際反核法律家協会で活動

事務所では30人ほどのコスタリカ人とともに働いた。国際法、核軍縮に関わる仕事為主で、要約





やレポート、NPT会議のために資料を見直すなどの準備をした。また原爆被災地の「原爆投下を裁く国際民衆法廷」では、20ページほどの判決文を訳すという大きい仕事も経験した。

「最初は思ったように言葉も通じなくて、とまどうことばかりでした」。一番驚いたのはコストリカの主な交通手段であるバスだ。「降りたい際に押すボタンが乗るバスによっては、ボタンではなくて紐だったり、時刻表の表示や車内のアナウンスもないので、外の景色を見ていないといつ降

りればいいのかわからなくなるんです」。また停電が多いことや、暗くなると女性1人では危険で歩けないなど日本との違いも痛感した。

語学習得には「恥を恐れない」こと

スペイン語だけでなく、英語も堪能な井上さん。語学が上達するコツ”ってあるのだろうか。「コミュニケーションでは間違えるのが恥ずかしいという思いはあるでしょうが、その間違いを恐れずに話そうとする姿勢が大事」という。記者はスぺ

イン語を履修していることもあり、「恥を恐れない」ということが語学習得の早道であるとの教訓を得た思いがした。

「高校時代には英文をひたすら読んだ」そうだ。「文法では文章を多く読む方がいい」と教えてくれた。海外経験も豊富でアメリカに3週間と中南米にも行った。旅行好きでもあり、メキシコ、グアテマラ、パナマな

どを旅した。

「同じスペイン語でも国や地域ごとになまりがあったり、言うことが違っていたりするから、まずは行ってみて肌で感じてみるのが面白いと思います」

就職先はIALANA日本支部

4年生の井上さんは、インターンで働いた国際反核法律家協会の日本支部に就職が決まっている。日本企業の説明会などにも行ったそうだが、自分と向き合って考えた結果、「本気でやりたいことをやろう」と決意。「日本は被爆者とのつながりが深い国です。そういった人たちの話を聞いたりして、少しでも軍縮・反核に貢献できたら」との思いで就職先を決めた。

「自分の語学力を仕事に活かしたい。今は最先端の論文や研究はほとんどが英語なので英語ができないと困ったことになる。またスペイン語圏から仕事で来日した人たちの通訳もしたい」と将来を描く。

「スペインはもちろん、他のヨーロッパの国々やアジア・アフリカなど色々な国を旅して、たくさんの人々とお話したい」と目を輝かせ、自然に笑顔がこぼれる。この先ますます語学力に磨きがかかることだろう。

(学生記者 野村茉莉亜 Ⅱ 商学部2年)